

年4月には、本班専任の歯科医師を配置した「訪問歯科診療班」として組織の充実を図った。さらに、平成12年11月には附属病院機能の向上を目指して「地域支援医療科」を新設したことにより、「訪問歯科診療班」は「訪問歯科診療室」と改称された。

今回は、平成14年1月から11月末までの「地域支援診療科」としての活動について報告する。

1. 訪問歯科診療の実績

訪問診療を実施した患者数は73名（平成13年同期間：93名）であり、延べ訪問診療回数は716回（平成13年同期間：683回）であった。

訪問先については、居宅が505回（71%）で最も多く、高齢者施設が172回（24%）、入院中の医科病院が39回（5%）であった。

訪問先の地域別分布では、当別町が337回（46%）、厚田村が172回（24%）、江別市が143回（20%）、月形・浦臼町が15回（2%）、岩見沢市が20回（3%）、北村が18

回（3%）、札幌市北区が3回（0.4%）であった。

2. 歯科医師への学術講演の実施

歯科医師に対して、訪問歯科診療関連の学術的な情報を提供するための講演・セミナーへの講師派遣は3回であった。

3. 地域住民への啓発活動

地域住民に対して、疫学調査を含む研究結果をもとに口腔、顎顔面、咽頭領域の機能を概説し、顎口腔系機能の全身の健康維持に果たす役割の重要性を啓発するための活動として、講演会への講師派遣は1回であった。

近年、口腔の健康と全身の健康との関連性が明らかにされつつある。特に高齢者のQOLの観点から、正常な咀嚼・嚥下・発語を行いうる顎口腔系の健康を維持することの重要性が叫ばれている。今後も、「地域支援診療科」としては、「治療」の観点からの訪問歯科診療と、「予防」の観点からの啓発活動に対して、さらなる積極的な取り組みが必要であると考えられる。

17. 知的障害者の歯周疾患に関する縦断研究

○有路 博彦, 杉村 典彦, 伊藤 泰城, 望月 研司, 富岡 純, 吉田 拓司,
池田 雅美, 小林 孝雄, 藤原 純, 山崎 厚, 湯本 泰弘, 衣笠 裕紀,
加藤 幸紀, 森 真理, *藤井 健男, 中島 啓介, 小鷲 悠典
(北海道医療大学・歯科保存学第1講座・*北海道医療大学医科歯科クリニック)

【目的】運動障害伴う知的障害者の口腔の健康管理は、十分な治療体制の実施が困難なことから健常者に比べて立ち遅れている。

本研究は、知的障害者を対象とし、施設生活指導員と協力した口腔清掃指導とスクレーリングを21年間にわたり実施した。この発表はその成果と問題点について検討する。

【対象者および方法】対象者は知的障害者施設に入園している有歯顎者の成人30名とした。(男性14名,女性16名,初診時平均年齢31.3歳)

まず、施設の生活指導員に口腔の健康の重要性を認識してもらうために、指導員に対してモチベーションと口腔清掃指導を行った。指導員は毎日入園者に口腔清掃の指導や、そのための介助を行うこととした。初診時から2年間は基本治療で通常の歯周治療を行った。

その後、入園者に対して口腔内診査および口腔清掃指導とスクレーリングを中心とした治療を6ヵ月毎に行った。診査はブラーク付着率(PCR),歯肉炎指数(Modified GI),4mm以上の歯周ポケットの出現率(Po.R),喪失歯数について行った。このプログラムを21年間継続した。

【結果】Modified GIは初診時1.4から3年後0.5に減少し、その後概ね0.8前後の値を示した。しかしながら、ここ2年間は0.6であった。PCRは初診時75.8%から3年後には47.2%に減少し、その後概ね60.4%を維持した。ここ2年間は68.8%,76.7%と高い値を示している。Po.Rは初診時13.0%から3年後には5.3%に減少し、その後は7.7%を維持してきたが、ここ2年は上昇してきている。初診時残存歯数は672本,21年間の1人平均喪失歯数は1.96本であった。メンテナンス期間の1人平均喪失歯数は1.26本,21年間歯を失わなかった者は56.6%であった。

【考察】最初に指導員にブラッシングの重要性について動機付けをし、その方法を習得させ、被験者のブラッシングの習慣化を図ったことは障害者の歯周治療に効果的であった。21年間に徐々に各スコアが増加する傾向にあった。

今後、口腔清掃指導の再教育,モチベーションの再構築をしなければならないと考えられた。さらに対象者の高齢化への対象法についても考慮する必要があると考えられた。